

テモテ第二4章9－22節 「最後に会いたい人」

1A 悪い業からの救い 9－18

1B パウロを見捨てる同労者 9－15

2B 御言葉を宣べ伝える力 16－18

2A 挨拶 19－22

本文

テモテへの手紙第二4章を開いてください。今日で最後の学び、4章9節から22節までを読んでいきます。パウロは、自分自身が皇帝ネロの前で死刑判決が出るであろうことは、かなり確信していました。それでこの手紙を書いていた訳ですが、最後に4章で、「1 神の御前で、また、生きている人と死んだ人とをさばかれるキリスト・イエスの御前で、その現われとその御国を思って、私はおごそかに命じます。」と言って、厳かに命じました。それはみことばをしっかりと宣べ伝えること、忍耐して教えることでしたが、その理由が、「3・・・人々が健全な教えに耳を貸そうとせず、自分にごうの良いことを言うてもらうために、気ままな願いをもって、次々に教師たちを自分たちのために寄せ集め、4 真理から耳をそむけ、空想話にそれて行くような時代になるからです。」というものだからです。多く、福音の働き人と呼ばれている人々の中でも、こうした空想話をしていくような人々が増えていっていたものと思われまます。

そして彼は、死期が近いことを思って、「7 私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。」と言います。ちょうどオリンピックの選手が、十分に試合をこなして、引退に入るように、自分の信仰の競走は走って目標に近づいていることを話しています。その行き着くところは、冠です。「8 今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。私だけでなく、主の現われを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです。」このようにパウロだけでなく、他の信仰者たちも、主の現われ、その再臨を愛し、慕っている者たちは、同じように義の冠を受けます。

1A 悪い業からの救い 9－18

そして9章からであります。基本的にパウロは、「テモテに早く自分のところに来てほしい」という話をします。自分と彼との間にある信頼関係は、信仰の父と子のそれでありまます。世を去る前に彼に会いたい思いを伝えます。それだけでなく、自分がいるところから、これまで同伴していた働き人、また自分の周りにいた働き人の中に、彼から離反する人々、見捨てる人々がいたということです。「世の終わりになると困難になる。」ということ、働き人や信者の間においても目の当たりにするという厳しい現実を、最後の挨拶では示しています。しかし、それは落胆に終わりません。確かに愛し合う兄弟姉妹がそれでもいる。そして何よりも主ご自身がいる、ということとはとても大きな慰めになります。

1B パウロを見捨てる同労者 9-15

9 あなたは、何とかして、早く私のところに来てください。

パウロのこの言葉に、彼の生身の人間の姿が表れています。この人間性を神は否定することはないと思います。やはり、信仰の友が共にいないということ、それは誰にとっても辛いものです。結婚なので完全には当てはまらないですが、主は男を造られて、「ひとりでいるのはよくない。」と言われました。その前に、主なる神ご自身が唯一の方にさえ、複数の人格、父、子、聖霊がおられて、その交わりの中におられて、ご自身を「私たちは」と呼ばれています。私も、独りでいることは淋しいと感じ、それは不信仰かな？と自分を責めるのですが、そんなことはない、これは健全な気持ちであることを、ここを読むと分かります。

そして、他の手紙でもそうですが、パウロと他の働き人や信者との関わりはとても広いものでした。私たちは彼の手紙を読むと、その書かれている教えに注目しているため、彼がそのような人間のふれあいをしていることをふと忘れてしまいます。けれども、彼の宣教の働きは決して独りではなく、いろいろな人々との関わりや結びつき、そして彼中心ではなく、いろいろなところで宣教の働きが展開していて、ある時はあの人といっしょだったけれども、今は他の人といっしょというような、人々の行き来もあったことが分かります。彼は決して一匹狼ではありませんでした。このような挨拶ができるかどうか、つまり、いろいろな主を愛する人々との交わりや関わりの中に自分が生かされているかどうか、ということは思い返してみるとよいでしょう。

10 デマスは今の世を愛し、私を捨ててテサロニケに行ってしまう、また、クレスケンスはガラテヤに、テスはダルマテヤに行ったからです。

「デマス」は、先ほど読んだ、「主の現われを慕っている者」から離れ、世を慕う者になってしまいました。そして他の手紙を読むと、彼は、「走るべき道のりを走り終え」なかった人であることが分かります。初めは走っていて、よく走っていたのですが、次第にその行程から離れていったのです。

彼は初め、パウロから「同労者」と呼ばれました。ピレモンへの手紙 24 節には、「私の同労者たちであるマルコ、アリストアルコ、デマス、ルカからもよろしくと言っています。」とあります。コロサイ人への手紙では、「愛する医者ルカ、それにデマスが、あなたがたによろしくと言っています。(4:14)」とあります。そして、ここテモテへの手紙では、「今の世を愛し、私を捨ててテサロニケに行っていました」と言っているのです。デマスとルカが並んでいるので、おそらく二人が共に働いている期間はかなり重なっていたのだらうと思います。そして事実、デマスもルカもローマにいました。11 節に、「ルカだけは私とともにおります。」と言っています。あのルカによる福音書を書いたルカであり、また使徒の働きを書いたルカでもあり、彼の宣教旅行に同伴していました。

テモテへの第二の手紙を読んでいますと、「見えるところは敬虔であっても、その実を否定する

(3:5)」というのが、終わりの時代の特徴なのだということを思わされます。そのままイエス様を信じていると言っている人々はいるのです。けれども中身が、世における自分を愛する流れになってしまっている、ということです。アメリカの教会において、2001年の米同時多発テロの後の状況について教えている統計がありますが、絶対的な悪があると答えている人が減ったとのこと。つまり、聖書が神の言葉、真理の言葉であるという信頼が減ったということです。ところが、イエス様を信じているという人、祈っているという人の割合は若者を中心に増えたとのこと。¹このことから何が分かるかという、敬虔な雰囲気はそのまま残されていて、その中身、真理が軽視されるようになっている、ということでもあります。

けれども、福音の中に生きるということは、必ず困難を伴います。「3:12 確かに、キリスト・イエスにあつて敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。」とパウロは言いました。けれども、それを避けようとする中で、「悪人や詐欺師たちが、だましたりだまされたりしながら、ますます悪に落ちて行く」ということを経験します(3:13)。しかし、かの世、後の世を私たちは信仰を持っていないといけな。御国の到来を見なければいけない。ところがデマスのように、「今の世」を見てしまったということです。これは彼にとって、とても辛かったでしょう。

けれども他の働き手は他の理由で、パウロから離れています。「クレスケンス」については、知られていませんが、「テス」は次のテスへの手紙のテスです。彼もテモテと同じように、「同じ信仰による真実のわが子(1:4)」と呼んでいます。テスへの手紙では、テモテに対して行なったと同じように、テモテをクレテ島に残して、そこにある問題のある人々に対処させていたようです。反抗的な者、空論に走る者、人を惑わす者が多くいたようで、彼らの口を封じて、そして健全な教えでもって彼らを守り、長老を任命していくことを命じていました(テス1章)。彼をダマルテヤ、今のクロアチアにありますが、そこに遣わしています。ですから、テスやクレスケンスについては、むしろ良い意味でそこから離れていますが、離れたことによって自分が淋しくなっていることは事実なのです。

11 ルカだけは私とともにおります。マルコを伴って、いっしょに来てください。彼は私の務めのために役に立つからです。

先に話したように、ルカは宣教旅行の途中から、同行してそれから彼と一緒にいた人でありました。使徒の働き16章11節から、「そこで、私たちは」と主語が「私たちは」になっていることから、分かります。パウロは、終わりの日における厳しい現実を見ていると同時に、決して働き人に対する神の憐れみを忘れていませんでした。人を赦さないでいるということも、これまた悪魔の仕業です。

¹ <http://www.logos-ministries.org/blog/?p=4718>

マルコは、一度、彼を見放した人であります。「パウロの一行は、パポスから船出して、パンフリヤのペルガに渡った。ここでヨハネは一行から離れて、エルサレムに帰った。(使徒 13:13)」ヨハネはマルコの別称ですが、マルコの母は、ペテロが牢屋から救い出されるために弟子たちが祈っていたその家を開放していました(使徒 12:12)。けれども、宣教の苛酷さからなのでしょうか、マルコはエルサレムに戻って行ってしまったのです。それでパウロは第二次宣教旅行に行く際に、バルナバとマルコのことでも激しく対立しました。「幾日かたって後、パウロはバルナバにこう言った。「先に主のことばを伝えたすべての町々の兄弟たちのところに、またたずねて行って、どうしているか見て来ようではありませんか。」ところが、バルナバは、マルコとも呼ばれるヨハネもいっしょに連れて行くつもりであった。しかしパウロは、パンフリヤで一行から離れてしまい、仕事のために同行しなかったような者はいっしょに連れて行かないほうがよいと考えた。そして激しい反目となり、その結果、互いに別行動をとることになって、バルナバはマルコを連れて、船でキプロスに渡って行った。(使徒 15:36-39)」

しかし、パウロはいつまでもマルコを、役に立たない者としてあしらっていなかったのです。ここに赦しの心、寛容な心があります。その時の判断は正しかったのかもしれませんが、いつまでもそれを思いつめ、公平さを失わせてはいけないということを学びます。

12 私はテキコをエペソに遣わしました。13 あなたが来るときは、トロアスでカルポのところに残しておいた上着を持って来てください。また、書物を、特に羊皮紙の物を持って来てください。

「テキコ」は、パウロと共に主に忠実に仕えた人です。宣教旅行に同伴しています(使徒 20:4)。そして彼が初めにローマに投獄されていた時に、エペソとコロサイにある教会に対して、テキコを遣わして、パウロたちの様子を伝えて励ましました。「あなたがたにも私の様子や、私が何をしているかなどを知っていただくために、主にあって愛する兄弟であり、忠実な奉仕者であるテキコが、一部始終を知らせるでしょう。テキコをあなたがたのもとに遣わしたのは、ほかでもなく、あなたがたが私たちの様子を知り、また彼によって心に励ましを受けるためです。(エペソ 6:21-22)」その彼を今、エペソに遣わしています。つまりテモテがいるところに遣わしています。おそらく、テモテがエペソを離れて、パウロのところに来ることができるようにしたのでしょう。

そして、「トロアス」は小アジアの、ヨーロッパに行くための最後の港町ですが、そこに「カルポ」という兄弟がいたようです。彼のところに上着を置いていたようです。このように、雑用なことであってもしっかり責任をもって行なっている兄弟たちが彼の周りにいたということです。そして、彼はテモテに、「書物を、特に羊皮紙の物」を頼んでいます。おそらく聖書そのもの、また聖書に関する書物だったのでしょう。パウロは死の直前であるということで、自分のすることを変えませんでした。最後の最後まで主に仕えていたのです。

14 銅細工人のアレキサンデルが私をひどく苦しめました。そのしわざに応じて主が彼に報いられ

ます。15 あなたも彼を警戒しなさい。彼は私たちのことばに激しく逆らったからです。

働き人の中には、このような者もいました。初めは信仰を持っているとされていても、途中で信仰を捨ててしまいました。彼はおそらく、テモテ第一に出てくるアレキサンデルであると思われます。「1:20 その中には、ヒメナオとアレキサンデルがいます。私は、彼らをサタンに引き渡しました。それは、神をけがしてはならないことを、彼らに学ばせるためです。」ある注解によると、こんな見方をしています。酷く苦しめたとありますが、もしかするとアレキサンデルはローマ当局に対して、パウロを通報したのではないか？ということです。そして最初の弁明をパウロが法廷でした時に、彼はパウロに反対する証言をしたのではないか、ということです。今のパウロの状況を直接作り上げたのは、アレキサンデルではないか？ということです。ただ、15 節の「私たちのことばに激しく逆らった」というのは、霊的には、パウロやテモテの信じている福音の真理の言葉に、激しく逆らったということでありましょう。

パウロはここで、テモテに対しても同じように厳しく臨むように命じていることです。「アレキサンデルは、激しく逆らったけれども、根は良い人ですよ。」というようにテモテが反応することもできたかもしれません。けれども、そうした人間関係の改善を求めるのではなく、個々の場合は福音の真理に敵対していて、それが彼を背反行為に駆り立てているとパウロは判断して、テモテにも厳しく対処するように命じているのです。この連携はとても大切ですね。そしてパウロは、ここにおいても祈りを込めています。「そのしわざに応じて主が彼に報いられます。」と言っていますが、これは彼自身が、アレキサンデルを裁くのではなく、主に復讐を任せているのです。もしここで、仮に主が憐れみを示すことをお決めになっていたら、パウロは喜んで主の御心に従ったでしょう。そういった意味も含まれた言葉であります。

2B 御言葉を宣べ伝える力 16-18

16 私の最初の弁明の際には、私を支持する者はだれもなく、みな私を見捨ててしまいました。どうか、彼らがそのためにさばかれることのありませんように。

ああ、なんと辛いことであつたでしょうか？「私を支持する者はだれもなく、みな私を見捨ててしまいました。」とのことです。これが現実であつたのです。彼と共にいるということが、どれほど自分たちにも苦しみがあるか知れなかつたのでしょうか。おそらく、恐れしらずのこの使徒の弁明で、自分が同じ仲間であることが知られたら、命が危うかつたのかもしれません。使徒 28 章の、第一回目の投獄においては、まだ自由がありましたが、皇帝ネロは、紀元 64 年のローマの火事をクリスチャンが放火したのだと丁稚あげて以降、悪霊に取りつかれたようにキリスト者迫害を激化させました。その上での弁明です。ですから、ちょうどイエス様を弟子たちが見捨てたように、パウロを見捨ててしまいました。

ここでパウロは、「彼らは主に見捨てられたのだ。」と苦々しい思いになりませんでした。むしろ、

もしかしたら主から、信仰から離れてしまうかもしれないと心配して、主の憐れみがあるように祈ったのです。「彼らがそのためにさばかれることありませんように。」とっています。

17 しかし、主は、私とともに立ち、私に力を与えてくださいました。それは、私を通してみことばが余すところなく宣べ伝えられ、すべての国の人々がみことばを聞くようになるためでした。私はししの口から助け出されました。

ここは、すばらしい言葉です。「主は、私とともに立ち」であります。パウロに主が現われてくださったのは、この弁明のときの前に、二回ありました。一つは、コリントの町にいるときです。彼は、ヨーロッパへの宣教旅行を始めて、ピリピの町に行き、そこでむち打ちにあいました。テサロニケの町に行ったときは、ユダヤ人による扇動と騒ぎがありました。逃げるようにしてアテネに行ったときは、パウロの宣教のことばを信じた人はわずかでした。そして、コリントにいました。そこでも迫害がありました。このように、パウロは、自分がヨーロッパへの宣教に召されていることを、疑ってしまうような、がっかりするような状況の中にいたのです。「私はたしかに、マケドニア人に助けてください、と言われてヨーロッパに来たが、迫害の手を免れて逃げているだけではないか。本当に主は私がここにいることを望んでいるのだろうか。」と思ったに違いありません。このような暗黒の時に、主は幻によって、パウロに、「恐れなくて、語り続けなさい。黙ってはいけない。わたしがあなたとともにいるのだ。だれもあなたを襲って、危害を加える者はない。この町には、わたしの民がたくさんいるから。(使徒 18:9-10)」と言われました。そこでパウロは力づいて、一年半そこに腰をすえて、神のみことばを教えました。

もう一つ、主がパウロとともにいた時は、エルサレムにおいてです。パウロはもちろん、同胞のユダヤ人に対する熱い思いがありました。彼らの救いのためには、自分が神に呪われたものとなっても良い、とまで思ったのです。そして、多くの弟子たちの反対のもと、それでも聖霊に示されているとのことでエルサレムに行き、神殿にいるときに、ユダヤ人たちがパウロが異邦人を神殿に連れてきていると思って、彼をなぶり殺しにしようしました。ローマの千人隊長が彼を助け出しましたが、パウロはユダヤ人たちに、ヘブル語で救いの証しをしたのです。彼らはずっと聞き入っていました。しかし、「主が、行きなさい、わたしはあなたを遠く、異邦人に遣わす、と言われました。」と言ったときに、ユダヤ人たちが声を張り上げて、「この者を除け」と叫びました。そして、パウロは牢獄に連れて行かれ、それからずっとローマに行くまで、囚人となっていました。彼がどれだけ後悔したでしょうか。あの時に、「異邦人」という言葉を使うべきではなかったのではないか。また、ユダヤ人を説得させようとしたのは、自分の勝手な思い込みではなかったのか、などなど、くやしがつて、自分に失望していたかもしれません。けれども、主が夜に彼のそばに立って、「勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことをあかししたように、ローマでもあかしをしなければならない。(使徒 23:11)」と言われたのです。

このように、パウロの人生の中で最も暗黒のときに、主がそばに立って、彼をさらに宣教の働き

へと励ましを与えてくださったのです。例えばアブラハム、ロトと別れて、ロトがゾドムの近くの点泊を張りましたが、その時に主が、アブラハムがいるところを彼が所有すること、子孫を増やすことを約束してくださいました。主は、私たちが目に見えるものが切り離された時、目に見えない幻によって、そのご臨在と約束によって慰め、カづけてくださるのです。

そして、「私を通してみことばが余すところなく宣べ伝えられ、すべての国の人々がみことばを聞くようになるため」と言っています。パウロは最後の最後、殉教する直前まで、福音を伝えることが主眼にありました。ネロに対して法廷で、キリストを証言することを用意していたのでしょうか。彼に伝えることは、そのローマ全体に伝えていることに他なりません。このようにして、彼は「余すところなく宣べ伝えられ」、そして、「すべての国の人々が」聞くために奮闘していました。

そして、「私はししの口から助け出されました。」と言っていますが、これは誰を指すのか？文字通りではないと思いますが、第一回目の投獄の時のネロのことであつたでしょうか。それとも、比喩的に霊的な、物理的な大敵のことをどちらも指しているのでしょうか。おそらく、後者かなと思います。ペテロも、とてつもない迫害の相手の背後に、悪魔がいて、悪魔のことを「獅子」と呼びました。「1ペテロ 5:8-9 身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるしのように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。堅く信仰に立って、この悪魔に立ち向かいなさい。ご承知のように、世にあるあなたがたの兄弟である人々は同じ苦しみを通って来たのです。」

18 主は私を、すべての悪のわざから助け出し、天の御国に救い入れてくださいます。主に、御栄えがとこしえにありますように。アーメン。

ここでの「悪のわざ」とは、殺されることではありません。パウロにとって、死はまったく妨げになっていませんでした。悪のわざとは、自分の働きを妨げる、悪魔のしわざでありましょう。また、自分自身が悪の誘惑を受けることでしょう。クリスチャンにとって、死よりも恐ろしいものがあります。罪であったり、また主の御名を汚してしまうような不名誉なことを行なうことです。しかし、こうしたものから主は救い出してくださって、無事に天の御国に救い入れてくださるという確信であります。

2A 挨拶 19-22

19 節から、兄弟姉妹への挨拶をしていきます。

19 プリスカとアクラによろしく。また、オネシポロの家族によろしく。

プリスカとアクラは、以前はパウロの助け手でした。エペソにおいて初めに主に仕えていた人々であります。今は、同じくエペソにいるテモテを助けているようです。そしてオネシポロは、ローマの牢にいるパウロを捜し出してくれた人です。「1:16-17 オネシポロの家族を主があわれんでくださる

ように。彼はたびたび私を元気づけてくれ、また私が鎖につながれていることを恥とも思わず、ローマに着いたときには、熱心に私を捜して見つけ出してくれたのです。」兄弟が苦しんでいる時に、少しでも交わるということはとても励ましになります。

20 エラストはコリントにとどまり、トロピモは病気のためにミレトに残して来ました。

ここはテモテに、彼も良く知っている働き人がどこにいるのかを伝えている箇所です。「エラスト」は、テモテとも古い仲であります。パウロがアテネにいる時に、マケドニヤにテモテとエラストを送り出したと使徒の働きにあります(19:22)。テモテに、彼がコリントにいることを伝えています。そして、「トロピモ」は、テキコと同じくパウロに同行していた中で近しいです(使徒 20:4)。そして彼がパウロと共にミレトにいた時に、病気だったので彼を残したとパウロは言っています。「病気のために」と言っていますね。パウロでも癒すことのできなかつたのです。というか、癒しの賜物というのは、主の憐れみと主権のみによって行なわれたことであることが、ここで分かります。そして福音宣教者には、このような病が付き物と言ってもよいかもしれません。

21 何とかして、冬になる前に来てください。ユブロ、プデス、リノス、クラウデヤ、またすべての兄弟たちが、あなたによろしくと言っています。

冬になると地中海には航行する船がなくなります。海が荒れるからです(使徒 27 章参照)。ですから、遅すぎないように、冬になる前に来てくださいと頼んでいます。

22 主があなたの霊とともにおられますように。恵みが、あなたがたとともにありますように。

最後の手紙のしめくりです。主がともにおられるように、霊と共におられるようにということです。霊が勤められることを願っています。そして恵みがあるように、です。こうしてテモテへの手紙を読み終えましたが、主にあつてその務めを全うすることの大切さを学びました。